

7 病害虫の防除

(1) イグサシンムシガ

イグサシンムシガは5月から7月までは成虫のほか各生態のものが見受けられる。成虫の産卵は概して地際に近い部位を選ぶ習性があるので、干ばつの場合には被害が大きい。産卵部位は1.5cm-4.5cm間にあり、干ばつときには、この部位が露出している。

表14 イグサシンムシガの産卵部位(6月調査)
1963年 島根農試

地表より卵塊までの距離	卵塊数
1.5 cm以下	0
1.5 cm～3.0 cm	27
3.0 cm～4.5 cm	21
4.5 cm以上	0

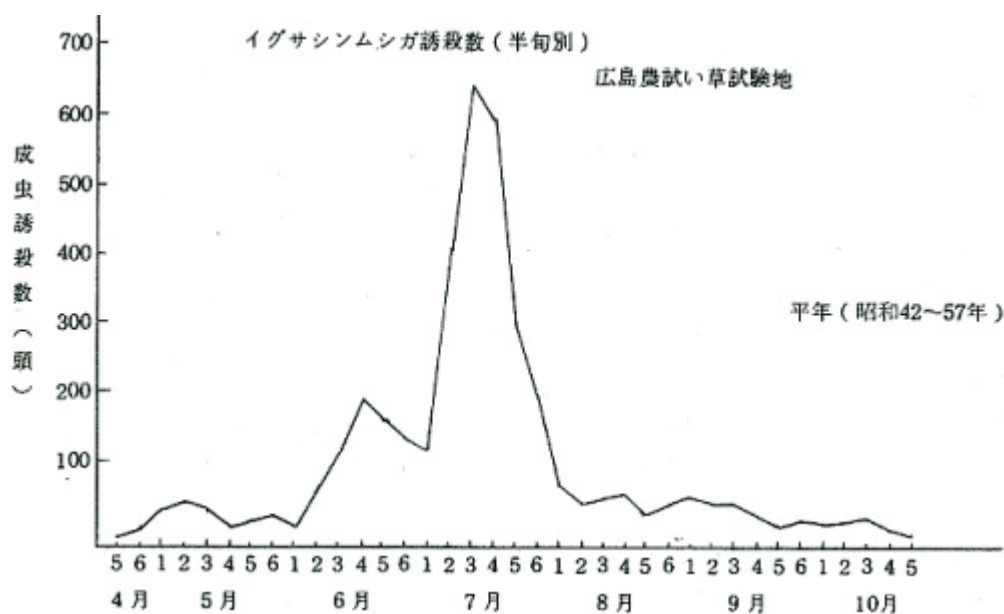


図3 イグサシンムシガ半旬別調査(平年昭和42-57年)

第1回の成虫は苗により本田に移行したものから発生する。
本虫の発生期間は5月から10月の間で年により異なるが4-5回の発蛾ピークがあり、年に4-5世代の経過をとると見られる。一世代の期間は30-40日と見られる。
5月中旬・6月中下旬の発蛾は「長イ」の発芽・伸長期にあたり、被害の甚だしいときは「長イ」の収穫皆無となる場合がある。

防除薬剤については、県防除基準による。

(2) 紋枯病

病徴からトラまたはブチともいわれ、茎及び葉鞘に6月初めから発生する。罹病茎は折れやすく倒伏すると被害は激甚となる。蔓延は菌糸により、菌核は茎の骨髓部に生じ、菌核の発芽および菌糸の発育温度は15-30℃で、湿度85%以上になれば発育し、100%では空中菌糸を出して蔓延する。

刈取り後又は泥染め後、いぐさの乾燥をしないまま積み重ねておくと本病蔓延のため甚しい被害が出る。いぐさ収穫後は主に菌核として水田及び畦の土壌・地表のい株・い屑・稲株等で越冬し、次年度の発生源となる。

マツバイの過繁茂は発生を助長する。防除薬剤については、県防除基準による。